

現代日本戲曲大系 8

現代日本
戲曲大系



現代日本戯曲大系 第八巻 定価三八〇〇円
一九七二年六月十五日 第一版第一刷発行
一九七三年七月三十一日 第一版第二刷発行
編者 三一書房編集部

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話 東京(二九一)三一一一

振替 東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

著丁本・乱丁本はおとりかえいたします

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

現代日本戲曲大系／第八卷／目次

1969

少女仮面……………

唐十郎

七

狂人なおもて往生をとぐ……………

清水

邦夫

六

劇的なるものをめぐってⅡ……………

鈴木

忠志

三

不思議の国のアリス……………

別役

実

六

1970

おもて切り……………

秋浜

悟史

二〇

ハマナス少女戦争……………

内田

栄一

一四

沖津浪闇不知火……………

宇野

信夫

一五

翼を燃やす天使たちの舞踏……………

佐藤信
斎藤憐

山元清多
加藤直

三六

人力飛行機ソロモン……………

寺山

修司

三六

吸血姫	唐	十郎	二五
はんらん狂騒曲	菅	孝行	三〇
嗚呼鼠小僧次郎吉	佐藤	信	三二
黒念仏殺人事件	藤田	傳	三七
解説	扇田	昭彦	四二
解題・付作品一覧			四三
演劇略年表(1969~1970)			四一
装幀 坂口顕			

凡例

- 作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。
- 作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。
- 明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。
- 文中の＊および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。
- 幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戲曲大系

第八卷

(1969~1971)

少女仮面

一幕

唐十郎

登場人物

貝（少女）

老婆

春日野八千代

腹話術師

その人形

ボーイ主任

ボーイ 1

ボーイ 2

水道飲みの男（サラリーマン風の男）

甘粕大尉

看護夫

防空頭巾の女 一

防空頭巾の女 二

防空頭巾の女 三

花の幽霊 第一場 V

花道に二人の少女がうずくまっている。明るくなる。一人は少女だが、もう一人は『少女フレンド』をかかえた老婆。二人はゆっくりと、そして力強く、黒い靴下をあげている。モモには赤い大きなガーター。

貝　ねえ、おばあさん、春日野さんが「嵐ヶ丘」に行つたとき自分がヒースクリップの役をやっているの。ヨークシャの荒野を横ぎるときになつて、あの二人の愛の亡霊と三角関係になるのじゃないかとひやひやしたと言っているのだけどあれはわくわくしたのじゃないかしら？

老婆　それは難解ね。
貝　もし、わくわくしたのなら、おばあさん、

それは不謹慎だと思われる？

老婆　貝、本当のこと言うと、永遠の処女の考えることは油断が出来ないよ。

貝　永遠の処女って？

老婆　そりや、ヅカ・ガールさ。おまえの春日野さんの話だつて、あたくしには嵐ヶ丘が嵐ヶ丘を訪問したように思えるのさ。

貝　何故、春日野さんが嵐ヶ丘なの？

老婆　すてたパンツに聞いてごらん。

貝　どういふこと？

老婆　ごめんよ、貝、おまえにこんなこと言うんじゃなかった。

貝　あたしね、おばあさん、春日野さんがわくわくしたのは決して、あの人が好きものだったからじゃないと思うの。二〇〇年たった今もヨークシャの荒野をさまようヒースクリップとキャサリンの二人の愛の乞食が、そう、

あの二人は未だに乞食なのよ、愛のね。だって、原作者も本の終りに「死者には安らかな眠りはない」と書いてあるもん。その二人が相寄りあつてもまださがしているものがあるのよ。ヨークシャの荒野をクシヤミをしながら、乞っているものが。もしかしたらそのことを、春日野さんは知っていたのじゃないかしら。

老婆 いや、何にも知りやしない。

貝 どうして？

老婆 春日野さんは、かすぐのでせい一杯さ。

貝 春日野さんは、そんなにかせいでないわ。

老婆 春日野さんは、今じゃ、重役。

貝 重役にだって、青春はあつたのよ。

老婆 その青春が曲者じゃ。

貝 ねえ、おばあさん、冷かすのはやめて、一言だけ言つて、春日野さんは何を知つていたの？

ヒースクリッフとキャサリンが、嵐ヶ丘をほつつき歩きながら乞っていたものは何なの？

老婆 亡霊が、いつも欲しがらるもの、それは——

貝 それは——？

老婆 肉体。

老婆の歌

（時はゆくゆく乙女は婆アに、それでも時がゆくならば、婆アは乙女になるかしら）

むかし、あたしにガキがいた、かずある中で只一人、ロ八丁の知恵主は山から帰つたツァラツストラ、垢で

汚れた大足をあたしの股にすりつけ

て
これが超人、グリグリグリ

母さん、聞いてよ、肉体は、大きな

理性でございます。ならば息子よ、

理性とは大きな肉体のことなのけ？

すると大足、ビクリととめて、

（セリフで）「論理はそう簡単にUターンするとはできません」

ニャロメ、言つたその口で、みるみるうちに超人は、小人のように、頬杖ついた。

錬金術は、サン・ジュルマンに。錬

眼術はメロ・ボンに。練肉術は誰に

しよう。

時はゆくゆく乙女は婆アに、それでも時がゆくならば、

婆アが乙女になるような、Uターン

秘術を誰が知らう。

秘術を誰が知らう。何よりも、肉体

を！

貝・老婆

（二人、口をそろえて）

急に、メリー・ホプキンスの「悲しき天使」が響いて、暗転。

ここは地下喫茶店（肉体）正面奥のつくられた窓の向うに風景画がかかっている。それは火山の噴火している古代地球、トンボまで飛んでいる。花模様の机とチェアー。右手は入口のドア。左手はカウンターらしく、大きな布巾を手にしたボーイ主任が立っている。右手の机には、一人の腹話術師と向いの椅子に、大人位の人形が

坐っている。音楽は、「悲しき天使」から、暗いシャンソン、ダミアの声に替つてもよい。突つ立っているボーイの両手の人指し指には、白い包帯が巻かれている。

腹話術師（低音で火山の絵を見て、人形に）あれは何年前の火山だと思ふ？

人形（高音で）ベスピアスだろ？

腹話術師 いや二十万年前のだよ。

人形 そうかい。じゃ、俺の時代だな。

腹話術師 どうして？

人形 人間が生きてない時代だからさ。

腹話術師 でも、存在のカケラはあつたんだよ。

人形 いや、そんなことは、形成以前の問題だから言つたてしようがないよ。純粹形成としては、俺、即ち、石とか、鉱物の時代だからね。

腹話術師 あまり、いばるなよ。

人形 世が世なら、いばらせろ。

腹話術師 ところで何にする？ コーヒーか紅茶か……

人形 コーヒーだ。

腹話術師（ボーイに手をあげて）あの、ちょっと。

ボーイ主任（ゆっくり近づく）はい、何に致しますか？

腹話術師 コーヒー。

ボーイ主任 一つですね。

腹話術師（人形の声で）二つだ。

ボーイ主任 いくつですって？

人形 二つだ。

腹話術師 と言ってるから二つ。

ボーイ主任 二つというのは？

腹話術師 わたしが一つで、こいつが一つだよ。

ボーイ主任 あ、そう。(腹話術師を人差し指をかくしたゲンコッで指さして)てめえが一つで(人

形のことを包帯の人差し指で)この方が一つだね。

腹話術師 おまえさんのやり方だとそういうこ

とになるのかい？

ボーイ主任 はい、さようで。

腹話術師 ともなく、二つ持つて来い。

この時、一人のサラリーマン風の男がドアをの

ぞく。

ボーイ主任 (そっちの方を見て)いらっしやいま

せ。

サラリーマン風の男 (おそるおそる、部屋に入っ

てくる。汗ぐしょである。手には、保険会社のカバ

ンを持つている。ゆっくりボーイに近づいたかと思

うとその前を通りすぎ、カウンターの横の水道の蛇

口に口をつける)

ボーイ主任 水だったら、お持ちしますのに。

(と言いながら、カウンターの中に去る)

サラリーマン風の男 (嬖々と水をすすっている。

その音がいい汚ない)

腹話術師 (それをじつと見ている)

ボーイ主任 (コーヒー二つを持って出て来る)お

待たせしました。

サラリーマン風の男 (水道の蛇口を開けっ放しで、

あたふたと去る)

ボーイ主任 (それを見つけて)あつ、お客さん、
御注文……。 (ドアのところまで追いかけるが、コ

ーヒー盆を手をしているので、思うようにならない)畜生。(と呟きながら、引き返して水道の蛇口をひねる。腹話術師のところへ来て)どうも、お待たせしました。(人形の前にコーヒーを置き、腹話術師の前に置こうとしてわざとコーヒーをひっくり返す)

腹話術師 あ、バカ。

ボーイ主任 すみません。あなた、そこにいた

んでしたねえ。

腹話術師 俺がいなくて、誰が注文する！

ボーイ主任 今、新しいのを持つて来ます。

(カウンターにかけ込む)

腹話術師 こんな店、初めてだ。(と言いながら、

ヘンカチで、テーブルの上をふく)

ボーイ主任 (コーヒー一つ持つて来て)お待たせ

しました。(と置こうとして、またひっくり返す)

腹話術師 あ、また！

ボーイ主任 すみません、あなた、いたんでし

たねえ。

腹話術師 ふざけるな、君つ、きみは、そんな

に、僕にコーヒーを飲ませたくないのか？

ボーイ主任 すみませんでした。私には貴方が

見えないのです。

腹話術師 メクラか、君は？

ボーイ主任 いいえ、ひとつもメクラではあり

ません。

腹話術師 何をしているんだ、じゃ？

ボーイ主任 置こうとすると、貴方が存在しな
くなるんです。

腹話術師 だって、この人形の前にはちゃんと
置いたじゃないか。

ボーイ主任 そりや、この方は存在なさります
もの。

腹話術師 俺はどうなんだ。

ボーイ主任 今、何か言いました？

腹話術師 俺はどうなんだ！

ボーイ主任 は？ よく聞かえませんか。

腹話術師 (ボーイ主任の耳に口をつけて大声で言

うゼスチュアをする)

ボーイ主任 (逆によく聞かえたらしく)なるほど。

腹話術師 今は何にも言わなかったのに。

ボーイ主任 でも、あなたの気持が察せられま

した。可哀相な人形の附屬物のご自身だと思

つてらっしゃるのでしょうか？ でも私は、同

情するわけにはいかなのです。存在の非存

在には、この人形の方の名は？

腹話術師 無名君だ。

ボーイ主任 わ、すごい立派な名まえ、附屬物

の名は？

腹話術師 僕のことを言ってるのか？

ボーイ主任 はえ。

腹話術師 アイだ。

ボーイ主任 阿呆の阿に、比べるものなしの比

ですか？

腹話術師 無名の者への愛の愛だ。

ボーイ主任 無名の者がさぞ迷惑でしょうね。

(と言いながら、テーブルに腰かけ、人形の前のコ
ーヒーを尻で倒す。急に人形をなぐる) ばかつ、

何で早く飲んでしまわないんだ！

腹話術師 おい、ひとの人形に何をやるんだ。

ボーイ主任 ほお、やっぱり怒るんですね。

腹話術師 当り前だ。

ボーイ主任 何で怒るんですか？ 痛いからですか？

自分の人形だと思うところやってつねられてもあなたは痛いんですか？

腹話術師 さわるな、ひとの人形に。

ボーイ主任 どこにひとがいるのですか？

腹話術師 俺のだぞ。

ボーイ主任 あんたが、人形の附属物だろ。

腹話術師 とにかく、それを離せ。

ボーイ主任 いいえ、絶対に離しません。この人形が離してくれと言うまでは。

腹話術師 ……て、ためえ——よ、よせ。

ボーイ主任 せつかく、いったコーヒーを冷ましてしまった罰だ。(髪をわしづかんで)コーヒーを冷まされると俺の血がホットになるのをしらねえな……(人形をなぐる、ける)

腹話術師 あつ、ひどい。

ボーイ主任 (グツタリした人形を見おろしているが、カウンターの奥へ口笛吹きながら去る)

倒れている人形と腹話術師、呆然としている。

腹話術師 (人形を抱き起こし、髪をなでつけてやる)痛かったろうな、偉いぞ、おまえはグウとも叫ばなかった。何んにも出来なかった僕を怒ってるだろうね。でも、おまえがなぐられてる間僕は身を切られるようにつらかったんだ。實際になぐられるのと、そばで手をこまねい

て見ているのと、どちらがつらいと思う？

ね、どちらがさ。そんな目で見えるなよ。僕は卑怯者さ、それでいつだって、おまえが犠牲になるんだ。もし、何だったら、別れたっていいんだ。でも、別れたらお前は一人でやってゆけるかい？

僕はやだ、やってゆけやしないよ。もう、こんな目に遇わないように世間の隅を波立せずにひっそりと生きてゆこう。ね、もう、こんなひどい目に遇わせやしないからさ。僕だって男だ、いつまでも黙ってやしない。いざとなったら、やってやる。さあもう忘れよう。(空笑いして) あいつの言ったとおり、僕はおまえの附属物かも知れんな、だって、こんなにお前のことを心配しているんだもん、俺にはいつも事件がなくて……

カウンターの奥より、二人のボーイがタップを踏みながら現われる。まるで、足長おじさんのように、巧みに、手に持ったコーヒー盆を落さずにタップを踏む。一人のボーイ、途中で足首を痛めたらしく前のめる。盆のカップがとび散る。

ボーイ主任 (とび出してくる。足首を痛めた男の前で、一踊りして見せ) はい、何も考えずに、おまえたちは靴だ。軽やかなタップ・シューズ！ 音楽！

歌いながら踊る。

「あの人にあったら、そつと言ってほしいの

「乙女の花が枯れたって

月経帯に千代紙はったって

女が一人うたってたって

でも、あの人はいもう来ない、きつと来やしないのよ

だって、あたしや皆既日蝕

ボーイ1 (歌いやめて) 何故、こんなことをしなければならいんですか。僕はコーヒーを運ぶだけでいい筈なのに。

ボーイ主任 生意気言うな。きさまは靴だ、コーヒーをはこぶ靴だ。

ボーイ1 僕は僕です。

ボーイ主任 おまえがそう思っているだけさ。

ボーイ1 僕が僕を思わずに、誰が僕を思うのですか？

ボーイ主任 そんなこと思わなかったって生きてゆけるよ。

ボーイ1 そんなの、僕は嫌だ。

ボーイ主任 俺は嫌じゃないね。好ましいよ。

ボーイ1 あ、僕くんががつちやった。

ボーイ主任 お前は靴だ。この喫茶店へ肉体に就職した以上、こきつかわれる靴だ。(靴とばして) 立て、若僧、音楽っ！

「あの人にあったら、そつと言ってほしいの

「乙女の花が枯れたって

月経帯に千代紙はったって……

(机の上の腹話術師の伝票見つけ) あつ、あいつ飲み逃げ……

主任 追いかけようと、ドアを開けて出ようと

すると、少女員と老婆に出会う。

ボーイ主任 いらっしゃいませ。

貝 (おそるおそる) あの春日野さんが経営なさ
ってる喫茶店はこちらでしようか。

ボーイ主任 あなた、ファン?

貝 ずいぶん、お手紙さしあげたんですよ。あ
あの人。(とボーイの一人がまた足をくじいたらし
く、それを指さす)

ボーイ主任 え? (振り返る)

ボーイ1 (うすくまって) 僕は嫌だ。僕は靴な
んかじゃない。僕はもっと内的な何者かなん
だ。

ボーイ2 (彼は機械のように踊りまくっている)

ボーイ1 それに、俺は馬車馬じゃないか。こ
んなにこきつかわれて、考えるひまなんか
ないじゃないか、もっと人間らしい時間が欲し
い。俺は元々、ゼンソクの気があるからこん
な商売、長つづきするわけがないんだ。ああ、
嫌になっちゃう。

ボーイ主任 (後ろからけとはす) おまえは靴だ、
おまえという名の靴だ。

ボーイ1 (立ち上がって) ちがう。あんなにどや
しつけられている以上、僕は靴という名の僕
だ。

ボーイ主任 そりゃ、過剰没入ではないだろう
か。

ボーイ1 僕は、こんなところにいたら、一生
浮かびあがれやしないんだ。

ボーイ主任 悩め、悩め、死ぬ程、悩め。

ボーイ1 (カウンター奥へかけ出しながら) ああ、
考える時間が欲しい。

ボーイ2 (機械のように踊っている)

ボーイ主任 (ボーイ2に) おい、お客さんだ。

ボーイ2 (ハイとも言わずに、眠るように、動き
出す)

主任、奥へ去る。

貝と老婆、坐る。静かなハーブソングの曲が
響く。

貝 おばあさん、もう歩かなくてすんだのね。
春日野さんのお店があるんだもの、宝塚はこ
の近くよ。

老婆 なにしろ大正時代の記憶だから。

貝 でも、あたし、本当にツカ・ガールになれ
る?

老婆 おまえ、きれいだもん。

貝 でも、すぐに舞台上に上れるわけじゃないん
でしょ。

老婆 おまえぐらい、きれいだったたら、すぐに
も上れるよ。上れないとしたら、それは組織
のせいさ。

貝 あたしが歌うのね——「おお、パリ、うる

わしのわがバリ」って。でも、恋もしないで、
宝塚に入ったら、いつ恋ができるのかしら。

老婆 鏡の自分に恋するのさ、一生ずっと。

貝 見あきることもあるかしら。

老婆 病みつきになりゃ、あきようたってあき
ないさ。

貝 そんなに自分がおもしろいもんかしら。

老婆 そんな世界で生きたなら、自分を自分で
傷つけるだけだもん。それだったら、痛くは
ないだろう?

貝 あたし、恵まれてるのね。

奥で、ドカドカと変な音がするが、すぐ止む。

ボーイ主任と二人のボーイがカウンター横にす
まして立つ。ボーイ1は、顔をすりむいて、鼻
に鼻血止めまでしている。

貝 あの、何かコーヒーでもいだけませんか?
か?

ボーイ主任 (答えずに宙を目で追っている。それは
一匹の蠅だ)

貝 あの、ボーイさん、コーヒーを。

ボーイ主任 (目の色が変わってくる)

ボーイ1・2 (ボーイ主任を気に見ている)

貝 じゃ、いいです。

ボーイ主任 (一匹の蠅を追って、爪先立って歩き出
す。蠅ににぎりつかもうと手を伸ばす、失敗する。
ますます目が血走ってくる。ヒューヒューいながら、
それをふみつぶす。やっと仕事が終わったらしく一息
入れる。) 何にしますか、お嬢さん。

貝 コーヒー。

ボーイ主任 もっと早く言やいいのに。(ボーイ
に) おい、コーヒーだって。

ボーイ1 豆がありません。

ボーイ主任 なに?

ボーイ1 豆を、あなたがあばれた時に、ひっ
くり返してありません。

ボーイ主任 買って来い。

ボーイ1 どこで……?

ボーイ主任 どこでって、豆をどこで買うってんだ、てめえは。女風呂ででも買ってくるのか? 交番に行つて聞いといで。

ボーイ1 ああ、何て店だ。(去る)

入れ違いに、さっきのサラリーマン風の男が、汗ぐしょで入ってくる。

ボーイ主任 何ですか?

サラリーマン風の男 ちょっと、水道を。

ボーイ主任 水道工事夫ですか、あんだ。

サラリーマン風の男 いえ、ちょっと、水道を。

ボーイ主任 水道をだから、どうするってんだ。

サラリーマン風の男 飲むんです。

ボーイ主任 飲むだと?

サラリーマン風の男 ええ、水を。

ボーイ主任 どうやって。

サラリーマン風の男 口つけて、チューチューと。えへへ。(自分の言っていることが急におかしくなつたらしくデヘへと笑い出す)

しらくた間。

サラリーマン風の男 (前進して) 水道をかしにくれ。

ボーイ主任 駅か、公園に行け。

サラリーマン風の男 (後ずさって) かさないつもりだな。絶対にかさないんだ。絶対にかさないって、もう、決心したんだ。その決心は、決して、ニブらないやつだな。意志のある人だな。時々、こういう奴がいるから俺も苦勞するんだ、嫌な奴。(と言って去る)

ボーイ主任 (ボーイ2に) おい、塩まいとけ。

ボーイ2 (カウンターから多量の塩を持って来て、バラまく、それは主任の顔にまでかかる)

ボーイ主任 (何かに疑問を持つて床にまかれた塩を指でひろつてじつくりとめる) おい、お前何をまいた。

ボーイ2 ——?

ボーイ主任 おまえ、砂糖まいたな。(手をあげてなぐるまねをする)

ボーイ2 (眞つ青になつて、部屋の隅にはいつくばり、頭を抱える。その途たんに手に持った砂糖袋がおびたどしく、床にばらまかれる)

ボーイ主任 あつ、もつたない。(袋にかき集めて、奥に去りかけんとして振りかえり) バカ。

ボーイ2 (まだ、頭を抱えているが、でかい図体をくの字にして、泣き出す。シクシクと泣きつつける)

音楽、また思い出したようにかかる。

ボーイ主任 (クシでボマードの頭をなでつけながら現われる) お嬢さん、あなた、うちの経営者に特別な用事で来られたんですか?

ボーイ2 (ボーイ主任が現われるとヒューヒューいながら、壁を伝つて逃げまどう)

ボーイ主任 (ボーイ2に) おい、奥へ行つてろ。

ボーイ2 (そろそろと去る)

ボーイ主任 若いあなた、あなたは一介のファンで、ちょっと経営者の顔でも拝みに来たんですか?

貝 あたし、春日野さんに役をもらいに来たの。

ボーイ主任 役? すると、あなたは、どこかの誰かさまでもいうのですか?

貝 いいえ、私、まだ無名です。

ボーイ主任 ほう、こえだめの野菊ね。あ、失礼。

貝 いいえ、気にしてません。春日野さんはいらっしゃるのですか?

ボーイ主任 経営者は、只今、入浴の準備です。

貝 五分でいいんです。会わせて下さい。

ボーイ主任 コネあんの?

貝 コネっ?

ボーイ主任 そう。若いのは、あんたばかりじゃないんだ。美しい娘だつて、あんたばかりじゃない。その婆さんとあんたとの二人の世界じゃ、常にあなたの方が若いという特権と役をもらえるかも知れぬが、あなた、若いあなた、そう、名前は?

貝 緑丘貝。

ボーイ主任 あ、そう、その緑丘貝さん、家には、春日野を頼つて一日一万人ものお血娘が訪ねてくるんですよ、はたまた、日本に何人のファンがいると思います? 気が遠くなるような数です。時々、集めて、遠足に行くんですが、コースを変えて、夢の島に寄る何人が蹴落してくることもあるんです。まったくそれだけの若い脂肪候補生、脂肪とはバターの塊という意味です。その脂肪候補生に囲まれていると若さとは一体何なのかわからなく

なつて、婆さんの方を大切にしたくなるというもんだ。意識する若さも、意識しない若さも、私には行為の後にそれにともなつた恥が追いかけて、そして、その恥さえもが、そんなに大した価値がないという意味において、無惨です。

貝 でも、青春、愛、挫折、希望はいつもロマンとして書かれますでしよう。

ボーイ主任 あなたは少女メロドラマのことを言っているのですか。

貝 いいえ、ゲーテです。

ボーイ主任 ゲーテだと!?

貝 怒らなくてもいいじゃない。

ボーイ主任 中天に輝く星の、この地上に届く時間に比べたら、ゲーテの栄光が一体何だというんだ。

貝 誰がその時間を知っているのですか?

ボーイ主任 え?

貝 星のこの地上に届く時間を。

ボーイ主任 私です。

貝 気が遠くなるそんな時間を本当にあなたは知ったんですか?

ボーイ主任 ことごとく知りました。鼻から吸って、口から細かく吐く程に。

貝 (ケタケタと笑う)

ボーイ主任 あ、笑ってる。

貝 そんな時間を、あなたはどこで知ったの?

後樂園のプラネタリウム、それとも、お母の股間ですか?

ボーイ主任 どこだと思う? 若いあなた。貝 知りません。

ボーイ主任 舞台だよ。

貝 え!?

ボーイ主任 あそこに立ちや、イカルスの星だつて見えるんだ。

貝 本当かしら、お婆あさん。

老婆 難解ね。

ボーイ主任 イカルスの星だつて手にとれる。没入感情の中に超越があることを、サラヴィ

ーダは知っていた。

貝 サラヴィーダつて?

ボーイ主任 海でルンバを踊るプレヒト役者のこと。

貝 ごめんなさい、あたし、舞台の知識がなく

て、春日野さんのことしか知らないんです。

でも、春日野さん、そんなに若い子や、演劇的知識に囲まれているんでは、あたしに会つて暇ないわね。

ボーイ主任 経営者はこれから入浴の時間です。

貝 待たせていただけます?

ボーイ主任 外は晴れてましたか?

貝 ねえ、待つて……?

ボーイ主任 外は晴れてました?

貝 陽傘をさす程よ。

ボーイ主任 ひとつも知らなかった。戦後からずうと外に出たこともないもんだから、そ

うやはり太陽はまだ滅びてないんですか。

貝 ビルもどんどん建つてゐるわ。

ボーイ主任 三階だてのですか?

貝 いいえ、四〇階だてよ。

ボーイ主任 (許せないというふうな) バカなつ。

貝 本当に外に出たことがないんですね。

ボーイ主任 工事は始まりそうでしたか?

貝 何の?

ボーイ主任 地下鉄工事です。ここらあたりが、そのルートになるらしいんですが……

貝 そういえば入口にブルドーザーが一〇台程、止まつてました。

ボーイ主任 やつぱり。

貝 主任さん、ねえ、春日野さんをここで待つてもいいでしょ?

ボーイ主任 結婚して子供を産んだらいらつしやい。

老婆 (急に貝の腕をとって) 貝つ!

ボーイ主任 ね、どこか呉服屋の若旦那と結婚

して子供をつくり、春風がそよそよ吹いて、それでもあなたがヅカ・ガールになる決心がついたらいらつしやい。

貝 だめよ、そうならたらあたし。

ボーイ主任 ほう、どうして?

貝 あたし、もう……若くないもの。

ボーイ主任 わたしには、今だつてあなたが若くは見えないんですがね。いくつ、あんな?

貝 十六。

ボーイ主任 三十二じゃなかったの?

貝 あたし、そんなこと言われたのはじめてよ。

ボーイ主任 ちようど、言われてよかつたじゃ

ない。

貝 お願ひです。あたし、きつと結婚したら、情熱が……

ボーイ主任 なに、情熱がなくなるとでも言うんですか？

貝 ええ。

ボーイ主任 そんな情熱くたばつてしまえ！

貝 だから、結婚しないと言っているんです。

ボーイ主任 結婚したっていい、離婚したっていい、再婚したって、問題はお前さんが、孕んだ子供をひきずり墮ろしても永久の処女の舞台に魅せられてるかってことなんだ。

貝 そんな情熱は病人の情熱よ。

ボーイ主任 病人でけっこう。病みつかぬ才能がどこにあるっ！

この時、入口のドアが開いて、また、あのサラリーマン風の男が入ってくる。

サラリーマン風の男 (びくびくと、弱り切つて) ああ、水道を……

ボーイ主任 (今度はあきれたのか黙っている)

サラリーマン風の男 (舞台すれすれに迂回して水道にたどりつき夢中で飲む。疑々とこの一幕が終るまで、飲みつづけて動かない)

ボーイ主任 (貝に) さあ帰つて、またいらっしやい。

貝 ここで帰つたら、あたしもう二度と来ないでしょう。

ボーイ主任 春日野は十三度結婚して、十三度子供を墮ろし、十三回離婚訴訟をおこし、そ

して十三人の男たちに肉体の片りんをかじりとられたものの、一つだに青春をかじりとられたことはなかった。だから、舞台で歌つておどる春日野は、母親ともつとも遠いところにある観念の結晶だ。ありや、肉体などではない。その春日野を見て、何万もの脂肪候補生がそのからだを感動という名でむやみやたらにブルブルとふるわせるのは俺には耐えられないのだ。

老婆 (貝に) 帰ろう、貝。

貝 あたし……あたし。

老婆 帰ろう、貝。

この時、カウンター奥より、二人のボーイの手で、風呂おけが運はれてくる。それは舞台中央に置かれ、その背後でちょうど、火山が爆発している感じになる。

ボーイ主任 さあ、若いあなた、春日野の入浴時間です。帰られますか？

貝 (じつとしている)

ボーイ主任 (ボーイ主任に) 早速、コーヒーをいれましょうか。

貝 コーヒー一杯っ。

ボーイ主任 はっ、只今。

ボーイ主任 (ボーイ主任に) 帰ると言つてるんだ。貝 コーヒー！

ボーイ主任 (ボーイ主任に) 豆は買って来たんです。

老婆 あたしもコーヒー。

ボーイ主任 ああ言つてます。

ボーイ主任 今日はこれで閉店です。(と言って、

婆アの椅子をもぎとり、婆アの肩を蹴る)

婆アは、「あつ」と言つてうつ伏し、そのはずみに抱えていた『少女フレンド』が転がる。

貝 おばあちゃん！

老婆 青春、愛、挫折、希望。

ボーイ主任 何を言つてるんだ。(『少女フレンド』をひろつて、婆アの方へ投げた瞬間、表紙がビリッと破ける)

老婆 あつ。(と言って、破れた本を抱きかかえ、

ボーイ主任を恨めしげに見る)

ボーイ主任 帰れ、チーズ婆ア。

老婆

ボーイ主任 脂肪をしぼるとチーズになるんだ。

老婆 表紙を、表紙を。

貝 (ボーイ主任にかじりついて胸を叩く) 何であなたは、そんな乱暴をするんですかっ！

ボーイ主任 (叩かせて、顔をそむけ) ああ、この

匂い。

「悲しき天使」鳴り響き、花道より男装の麗人

春日野が現われる。

ボーイ主任 湯は丁度いい按配です。

婆アも貝も春日野に気づく。永遠の処女春日野

はどこかを病んでいるふうに吐気を催す程ゆっ

くり歩いてくる。靴のカカトがバカに高い。春

日野はボーイ主任の言つたことにうんとうなず

き、ドン・ホセのようなすまし様で、客を振り

返る。この間、絶対に貝を見ない。明らかに春

日野は今、ヒーストリップの役を演じている。

春日野 (足をふと止めて) ちょっと音楽をとめと

くれ、ここは居酒屋じゃないんだ。(ボーイ主

此為试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com